

## 福井市における新築着工住宅の住空間構成の実態

—公室の規模と付加室の構成に注目して—

桜井 康宏\*      王   傑 荘\*\*

### Study on the Actual Condition of the Space Composition in Dwellings Newly Built up in Fukui City — From the Viewpoint of the Relation between Family Rooms and additional Rooms —

Yasuhiro SAKURAI and Ong Kiat Chuan

(Received Feb. 8, 1992)

This paper aims to typify the relation between family rooms and additional rooms in dwellings newly built up in Fukui city. Main conclusions are as follows;

- (1) In this paper, the relation between family rooms and additional rooms has examined in eight types. The composition of these eight types are greatly connected to the scale of family rooms.
- (2) The style of change of this composition caused by the total floor area differs according to the scale of family rooms.
- (3) The characteristics as mentioned above are also different by location of dwelling.

#### はじめに

① 現代は歴史の大きな転換期といわれ、社会のさまざまな分野で「戦後」の見直しや「近代」の総括が求められている。それは、生活の物的基盤である住宅の計画・設計においても例外ではない。具体的には、食寝分離論から公私室論に至る近代住居理論に基礎をもつ「居間中心型住居」に対して、伝統的な座敷と次の間をもつ「続き間型住居」が現代住宅の潮流として存在することが指摘され、それが「住宅の地方性」として論じられたり、あるいは「発展段階の差」として論じられている。そして、これらの論争をとおして、現代における住居・住宅の計画課題が、基本的にはわが国の近代化過程における「家族」像や「都市生活」像の未成熟と大きく関わっていることを浮き上がらせてきている。

② このような中で本研究は、玉置伸悟教授によってその地方的特性が一定程度明らかにされている福井市の住宅を対象として、その住空間構成の特性を「公室の規模」と「付加室の構成」という新たな観点から検討を加えようとするものである。

## 1. 研究目的と方法

### (1) 研究の目的と検討対象

① 本研究は、福井市における近年の新築着工住宅を対象として、その住空間構成の実態を「公室の規模」と「付加室の構成」という観点から明らかにすることを基本にして、さらに、「地方性」の詳細を明らかにする意味で「住宅立地」を加味し、また、物的条件としての基本である「延床面積」を加味しながら、その傾向的特性を明らかにすることを目的とするものである。なお、今回の検討では「公室」を含む住宅1階の「住空間構成」に焦点を当てることとする。

② 検討対象は、平成元年1月～8月に確認申請届出のあった専用住宅の中から「併用住宅」「2世帯住宅」16件および「住居としての水準を確保していない小規模住宅（「別荘」や「離れ」など）」7件、そして、後述の類型化にのらない「特殊例（公室が2階にあるタイプなど）」11件を除く473件である。

### (2) 分析の方法

住空間構成の実態を規定するにあたって以下のような類型化を行った。

① まず「公室」について、「K(台所)」を含む、あるいは「K」から連続的に連なる、しかも、一体的に使用しうる洋室を「公室」と定義し、その規模(面積)が $10\text{m}^2$ (6畳)未満を「K」タイプ、 $10\sim 20\text{m}^2$ (12畳)未満を「DK」タイプ、 $20\sim 30\text{m}^2$ (18畳)未満を「LK」タイプ、 $30\text{m}^2$ 以上を「LDK」タイプと称することとする。

② 「公室」以外の居室を「付加室」と称し、「公室」との関係で「接統系列(廊下を経ずに直接行き来が出来るタイプ)」と「独立系列(廊下を経由しないと行き来が出来ないタイプ)」の2タイプに区別する。

③ 「付加室」の様式を「和室(■)」と「洋室(□)」に区分し、「続き間」については基本的に「2和室続き間(■・■)」を「続き間」と称することとするが、「3室続き間(『■・■・■』や『■・■・□』など)」もそれに含むものとする。

④ 「接統系列」の接統形式(付加形式)について、「和室」あるいは「洋室」1室の接統形式については図1に示す「一体型」「両用I型」「両用II型」「通過独立型」の4タイプ、「続き間」

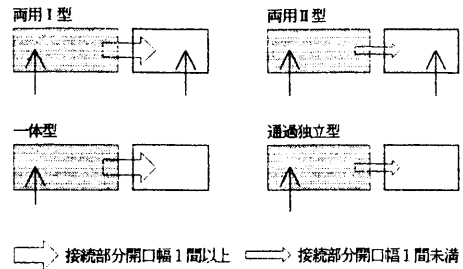


図1 「接統和室」の接統形式

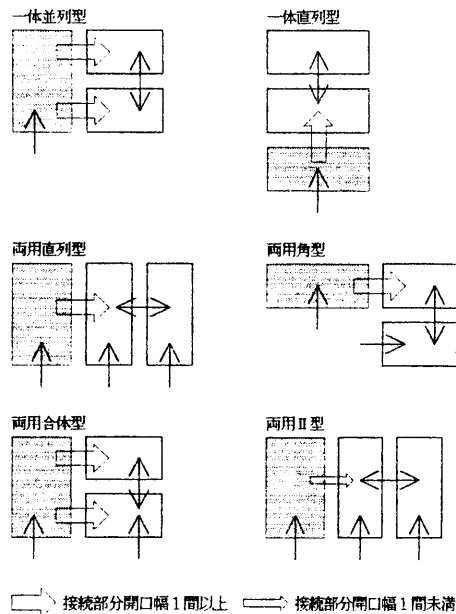


図2 「接統続き間」の接統形式



## 「続き間」をもつタイプ

「接続その他系列」……………その他の「接続系列」の付加室をもつタイプであり、「続き間」形式以外で2室接続するタイプなど

「独立和室系列」……………「接続系列」の付加室がなく、「続き間」もないタイプ

「独立続き間系列」……………「接続系列」の付加室がなく、「独立系列」の「続き間」をもつタイプ

「その他(洋室系列)」……………「接続系列」の「和室」がなく「洋室」をもつタイプ、および、付加室が「洋室」のみのタイプ

⑥ 住宅立地については、震災復興区域内を「中心市街地」、それを除く市街化区域内を「新市街地」、その他の周辺市街地を「周辺部」の3地域に区分することとする。

## 2. 住空間構成の概要

上記の方針に基づき、住空間構成タイプ化の結果を系統樹的に全て表現したものが図3であり、タイプ総数は113タイプ(LDKタイプ31, LKタイプ43, DKタイプ35, Kタイプ4)となる。これを、各公室タイプごとに付加室系列と付加室数の組合せで整理したものが表1である。さらに、これを図化表現したものが図4である。ここから以下の特性を読みとることができる。

① 公室規模タイプは、全体で「LK」タイプ42%、「LDK」タイプ31%、「DK」タイプ26%、「K」タイプ1%の順であり、付加室数は「2室」40%、「1室」29%、「3室」16%、「4室以上」11%(3室以上の合計27%)、「付加室なし」4%の順である。

② 公室規模タイプと付加室数との関係を見ると、「LDK」タイプと「LK」タイプの違いは少なく、いずれも2室未満の割合が約40%で相対的に高い(それに代わって3室以上が約20%に低下)のに対して、「DK」タイプは3室以上が約40%、2室未満が約20%と逆転している。

③ 付加室系列の内訳は多様であり、全体では「接続和室系列」が32%で最も多く、以下、「独立続き間系列」19%、「接続続き間系列」15%、「独立和室系列」11%、「接続和室+独立続き間系列」9%、「接続その他系列」6%、「その他(洋室系列)」2%、そして「付加室なし」4%となっている。

④ 付加室系列は公室規模タイプによって異なっている。まず、大きく「接続系列」と「独立系列」の割合でみると、「接続系列」の割合は「DK」82%>「LK」60%>「LDK」53%の順、

表1 公室の付加室の構成

全体付加室構成		0	1	2	3	4	5	6	7	8	小計%	合計%
LDK	付加室なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.1%	1.3%
	接続和室系列	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3	36.1%	11.2%
	接続続き間系列	0.0%	6.3%	4.0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	11	7.5%	2.3%
	接続和室+独立続き間系列	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.2%	8	5.4%	1.7%
	接続その他系列	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.4%	0.2%	0.2%	0.2%	6	4.1%	1.3%
	独立和室系列	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	21	14.3%	4.4%
	独立続き間系列	0.0%	3.4%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36	24.5%	7.6%
	その他(洋室系列)	0.0%	0.0%	4.9%	2.1%	0.6%	0.2%	0.2%	0.2%	6	4.1%	1.3%
	小計	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.4%	0.4%	0.4%	147	100.0%	31.1%
	合計	4.1%	34.7%	40.6%	13.6%	6.8%	6.8%	6.8%	6.8%	10	5.1%	2.1%
LK	付加室なし	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	31.0%	12.9%
	接続和室系列	0.0%	8.0%	3.6%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	61	15.2%	6.3%
	接続続き間系列	0.0%	0.0%	3.6%	1.9%	0.8%	0.2%	0.2%	0.2%	13	6.6%	2.7%
	接続和室+独立続き間系列	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	1.5%	0.2%	0.2%	0.2%	15	7.6%	3.2%
	接続その他系列	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	1.3%	0.2%	0.2%	0.2%	27	13.7%	5.7%
	独立和室系列	0.0%	4.7%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36	18.3%	7.6%
	独立続き間系列	0.0%	0.0%	5.1%	1.3%	1.3%	0.2%	0.2%	0.2%	5	2.5%	1.1%
	その他(洋室系列)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2	1.0%	0.4%
	小計	0.0%	16.8%	20.6%	3.6%	3.6%	1.7%	1.7%	1.7%	197	100.0%	41.6%
	合計	5.1%	31.6%	38.6%	13.2%	11.7%	11.7%	11.7%	11.7%	2	1.6%	0.4%
DK	付加室なし	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	31.7%	8.2%
	接続和室系列	0.0%	2.1%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	31	25.2%	6.6%
	接続続き間系列	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10	17.0%	4.7%
	接続和室+独立続き間系列	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9	7.3%	1.9%
	接続その他系列	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2	1.6%	0.4%
	独立和室系列	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	18	14.6%	3.8%
	独立続き間系列	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	17	10.0%	2.6%
	その他(洋室系列)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%
	小計	0.0%	2.1%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	77	100.0%	1.3%
	合計	0.4%	2.1%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50	47.3%	10.0%

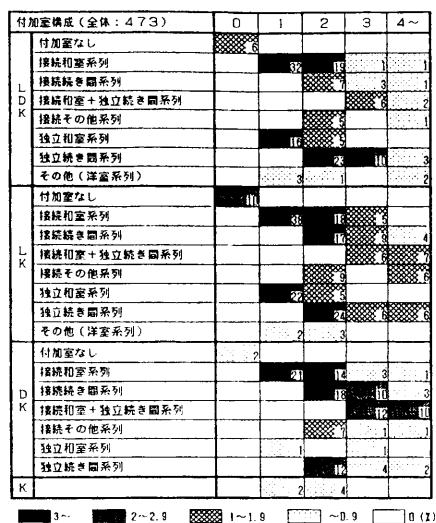


図4 公室と付加室の構成  
(全体)

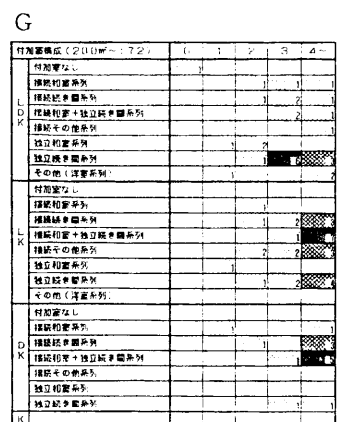
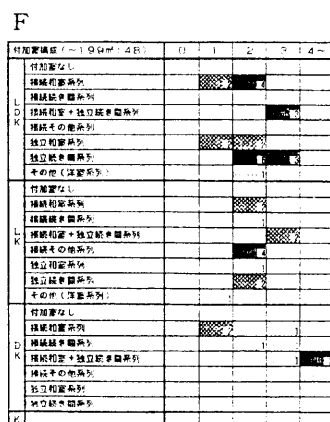
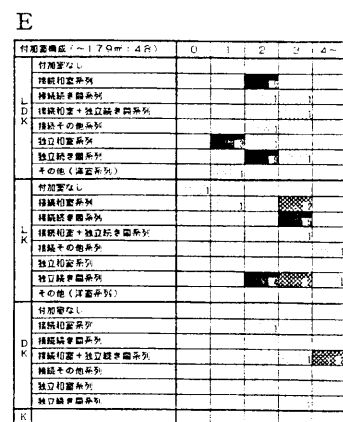
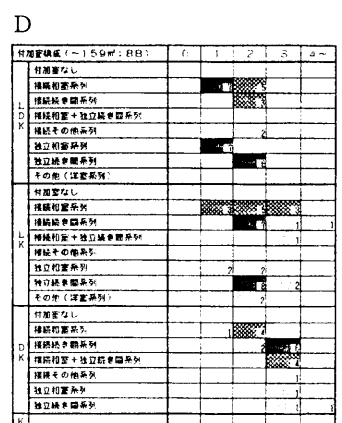
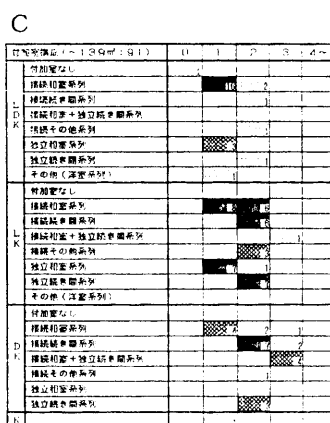
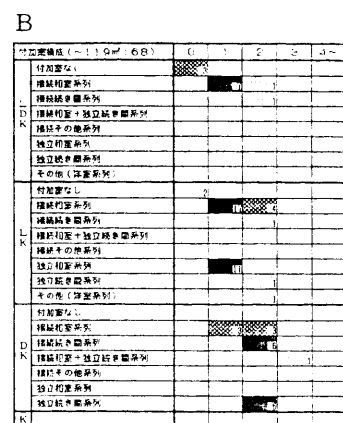
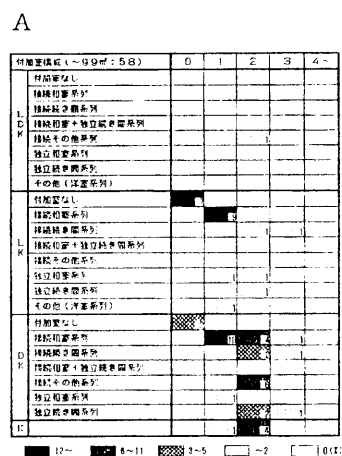


図5 公室と付加室の構成(延床面積別)

「独立系列」の割合は「LDK」39%＞「LK」32%＞「DK」16%の順であり、公室規模の拡大にともなって「独立系列」が増加すること、中でも「DK」タイプと「LDK」「LK」タイプとの違いが大きいことがうかがわれる。

⑤ 上記の「接続系列」の割合の違いは、主として「接続続き間系列」と「接続和室+独立続き間系列」の割合の違いによる(両者の合計割合は「DK」41%＞「LK」22%＞「LDK」13%の順、また、「接続続き間系列」のみの割合は「DK」25%＞「LK」15%＞「LDK」8%の順であり、「接続和室+独立続き間系列」の割合は「DK」で飛び抜けている)ものであり、「接続和室系列」の割合はいずれのタイプでも30%強で安定している。

⑥ 「接続和室系列」と「接続和室+独立続き間系列」の合計、すなわち、「接続和室」をもつものの合計は「DK」50%＞「LDK」42%＞「LK」38%の順(全体では41%)、一方、「独立続き間系列」と「接続和室+独立続き間系列」の合計、すなわち、「独立続き間」をもつものの合計は「DK」33%＞「LDK」30%＞「LK」25%の順(全体では28%)である。いずれも「DK」タイプで高く、「LK」タイプではなく「LDK」タイプが続いている。

⑦ 以上からまとめると、付加室系列として「接続和室系列」が30%強で第1位である点は公室規模タイプによって変わらないが、「LDK」タイプでは「独立続き間系列」、「DK」タイプでは「接続続き間系列」が第2位として明確に位置づいているのに対して、両タイプの中間に位置する「LK」タイプでは第2位が不明確で「独立続き間系列」「接続続き間系列」「独立和室系列」などに分散している点が特徴的である(ちなみに、「LDK」の第3位は「独立和室系列」、「DK」タイプの第3位は「接続和室+独立続き間系列」である)。

⑧ なお、図3より個別にみた住空間構成の主要なタイプを列举すると以下のとおりである(括弧内数値は該当ケース数)。

1位：LK・■	(38)
2位：LDK・■	(32)
3位：LK+(■・■)	(24)
4位：LDK+(■・■)	(23)
5位：LK+■	(22)
6位：DK・■	(21)
7位：DK・(■・■)	(18)
8位：LK・(■・■)	(17)
9位：LDK+■	(16)
10位：LDK・■+■	(12)
DK+(■・■)	(12)
DK・■+(■・■)	(12)

### 3. 延床面積別にみた住空間構成

先の図4を延床面積ごとに示したものが図5である。また、各公室規模タイプごとの付加室数と付加室系列を延床面積ごとにまとめたものが表2、表3である。ここから以下の特性を読みとることができる。

① 公室規模タイプについては、延床面積の増加にともなって「DK」タイプが減少して(50%程度から10%程度まで),「LDK」タイプが増加する(10%程度から50%程度まで)傾向がみられるが、ただし、160～180㎡程度以上では「LDK」50%程度,「DK」20%程度で安定状態となる。また,「LK」タイプは延床面積に関わりなく30～40%程度で相対的に安定している。

② 付加室数は延床面積の増加とともに増加するが、140㎡程度および200㎡以上での変化がとりわけ大きくなっている。例えば、付加室数3室以上の合計割合は140㎡未満では10%未満であるのに対して、140～200㎡では20～40%程度となり、さらに200㎡以上で70%以上へと急増している。

③ 付加室系列については、140㎡未満では「接統和室系列」が40%を占めているが、140㎡台では「接統和室系列」「接統続き間系列」「独立続き間系列」の3系列に分散し、この中の「接統続き間系列」が160㎡台で「接統和室+独立続き間系列」にさらに分散し、180㎡台では「接統和室系列」「接統和室+独立続き間系列」「独立続き間系列」の3系列が主要となり、200㎡以上では「接統和室+独立続き間系列」「独立続き間系列」の2系列がより主要なものへと推移している。なお、「独立続き間系列」と「接統和室+独立続き間系列」の合計、すなわち、「独立続き間」をもつものの合計は、160㎡未満で10%未満から20%強にまで漸増しているが、160㎡ではほぼ50%に急増し、それ以上の面積帯では50%程度で安定している。

④ 各公室規模タイプ別に延床面積別の付加室数をみると、いずれのタイプでも延床面積の増加につれて付加室数は増加するが、また、いずれの面積帯でも付加室数は「DK」>「LK」>「LDK」の順となっている。ちなみに、付加室数3室以上が60%以上となる面積帯をみると、「DK」では140㎡以上,「LK」では160㎡以上,「LDK」では200㎡以上、また、付加室数2室以上が80%以上となる面積帯は、「DK」では100㎡以上,「LK」では140㎡以上,「LDK」では160㎡以上となっている。

⑤ 各公室規模タイプ別に延床面積別の付加室系列をみると、主要な系列が「LDK」タイプでは「接統和室系列」から「独立続き間系列」へと推移(160㎡を境界とする),「DK」タイプでは「接統和室系列」および「接統続き間系列」から「接統和室+独立続き間系列」へと推移する(やはり160㎡を境界とする)ことが明瞭にうかがわれる(例外的傾向として、100㎡程度の小規模面積帯の「DK」タイプに「独立続き間系列」がみられることがあげられる)。これに対して,「LK」

表2 延床面積別付加室数

付加室数		全体	～99㎡	100～149㎡	150～199㎡	200㎡以上
LDK	0	4.1%	—	25.0%	7.4%	—
	1	34.7%	—	58.3%	74.1%	46.7%
	2	40.8%	100.0%	16.7%	18.5%	53.3%
	3	13.6%	—	—	—	12.0%
	4～	5.8%	—	—	—	28.0%
LK	0	5.1%	31.8%	5.4%	—	5.6%
	1	31.5%	50.0%	75.7%	38.5%	13.5%
	2	38.6%	13.6%	18.9%	58.0%	84.9%
	3	13.2%	4.5%	—	2.6%	18.9%
	4～	11.7%	—	—	—	2.7%
DK	0	1.6%	6.7%	—	—	—
	1	17.9%	36.7%	15.8%	16.7%	4.8%
	2	41.5%	48.7%	78.9%	54.2%	28.6%
	3	25.2%	10.0%	5.3%	25.2%	61.9%
	4～	13.8%	—	—	—	4.8%
K	0	—	—	—	—	—
	1	0.4%	1.7%	—	1.1%	—
	2	0.8%	6.9%	—	—	—
	3	—	—	—	—	—
	4～	—	—	—	—	—

タイプはいずれの面積帯でも相対的に多様な傾向をみせており、140㎡未満では「接続和室系列」と「独立和室系列」が主要であるが、140～180㎡未満では「接続和室系列」「接続続き間系列」「独立続き間系列」などに推移しながら分散し、さらに180㎡以上では「独立続き間系列」を中心としながらも「接続和室+独立続き間系列」あるいは「接続その他系列」など「接続和室系列」や「独立和室系列」を除く多くの系列に分散している。

⑥ 以上からみて、住空間構成の多様性は、洋室の公室規模が20～30㎡未満という中間規模の「LK」タイプに集中的に現れていることがうかがわれる。

#### 4. 住宅立地別にみた住空間構成

先の図4を住宅立地別(「中心市街地」「新市街地」「周辺部」の3分類)に示したものが図6である。

① 公室規模タイプを立地別にみると、中心市街地と新市街地・周辺部での違いがみられ、前者の「DK」タイプ35%、「LDK」タイプ24%に対して、後者ではそれぞれ25%程度、30～35%であり、中心市街地では「DK」タイプ、新市街地と周辺部では「LDK」タイプの割合が相対的に高い(「LK」タイプはいずれも約40%である)。

② 付加室数については、中心および新市街地に比して周辺部で多い傾向がみられ、付加室数3室以上の割合は前者の25%程度に対して後者では37%となっている。

③ 公室規模タイプごとの付加室数を立地別にみると、「DK」タイプと「LK」タイプでは周辺部の付加室数が圧倒的に多いことがうかがわれる。すなわち、周辺部では両タイプとも付加室数3室以上が30%以上(2室未満は10%程度)であるが、中心および新市街地では10%程度以下に低下している(それに代わって中心および新市街地での付加室数2室未満の割合は、「DK」タイプでは約20%、「LK」タイプでは約35%に増加している)。これに対して、「LDK」タイプについては立地による付加室数の違いは極めて小さくなっている。

④ 付加室系列については、大きくみて「接続系列」の割合が中心・新市街地の65%に対して周辺部では57%に低下している。また、最も主要な系列である「接続和室系列」の割合も周辺部で相対的に低く(中心・新市街地での35%程度に対して21%)、それに代わって「独立続き間系列」が22

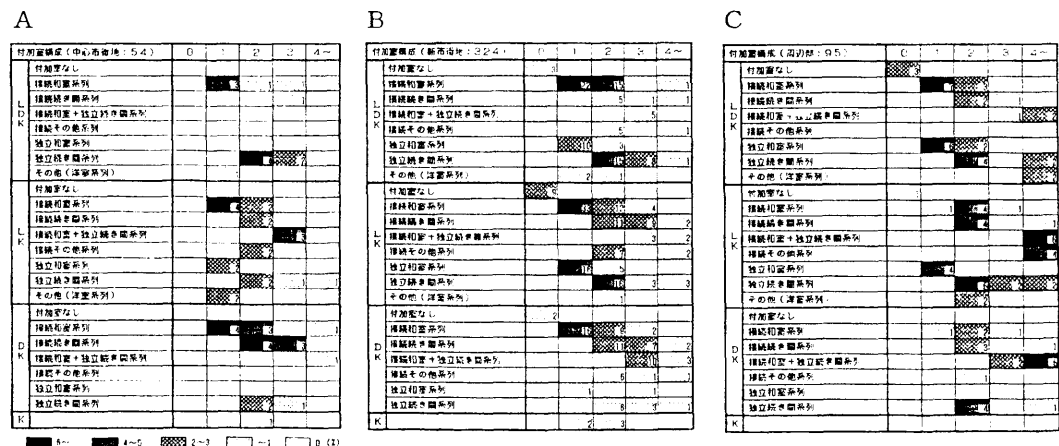


図6 公室と付加室の構成(住宅立地別)



％に増加して第1位となり、「接統和室＋独立続き間系列」の割合も相対的に高くなっている。

⑤ 「独立続き間系列」と「接統和室＋独立続き間系列」の合計、すなわち、「独立続き間」をもつものの割合は、周辺部40％＞中心市街地32％＞新市街地24％の順であり、新市街地での「独立続き間」が極めて少なくなっている。

⑥ 各公室規模タイプごとに立地別の付加室系列をみると、周辺部での「接統和室系列」の少なさは「DK」「LK」「LDK」いずれのタイプにも共通である。

⑦ 「LDK」タイプにおける「独立系列」の割合の高さ（「接統系列」の割合の低さ）は、主として周辺部における「独立和室系列」の割合の高さ（23％）と中心市街地における「独立続き間系列」の割合の高さ（46％）によっている。「LDK」タイプそのものの少ない中心市街地に「独立続き間系列」が目立つ点が注目される点である。ちなみに、「独立続き間系列」と「接統和室＋独立続き間系列」の合計、すなわち、「独立続き間」をもつものの合計も中心市街地46％＞新市街地29％＞周辺部25％であり、この点でも中心市街地での高さの特異性が目立っている（前述のように、全体的にみて「独立続き間」をもつものの割合は「DK」タイプに続いて「LK」タイプではなく「LDK」タイプで高くなっていたが、その要因が、この中心市街地「LDK」での「独立続き間系列」の高さにあることになる）。

⑧ 「LK」タイプについては、④項で述べたように周辺部で「接統和室系列」が少なく「接統和室＋独立続き間系列」および「独立続き間系列」の割合が高いという傾向が顕著に現れているが、中心市街地でもややその傾向がみられ、新市街地での「接統和室系列」「接統続き間系列」および「独立和室系列」の割合の高さが相対的に目立っている。

⑨ 一方、「DK」タイプの付加室系列については、立地による違いが極めて大きい。まず、「接統和室系列」と「接統続き間系列」はいずれも中心市街地＞新市街地＞周辺部という順序性が明確で、両者の合計割合（および内訳）は中心市街地79％（42％，37％）＞新市街地57％（33％，24％）＞周辺部36％（18％，18％）の順である。逆に、「独立続き間系列」と「接統和室＋独立続き間系列」の合計、すなわち、「独立続き間」をもつものの合計は周辺部59％＞新市街地28％＞中心市街地21％の順となっている。

⑩ 以上のように、住宅立地による住空間構成の違いは公室規模タイプによっても現れ方が異なっている。とりわけ、「DK」タイプで明確にみられる順序性が「LK」タイプや「LDK」タイプにみられない点、中でも、中心市街地の「LK」「LDK」タイプで「独立続き間」への志向性が相対的に強い点が注目される。

⑪ 最後に、個別にみた住宅立地別の主要な住空間構成タイプを示すと以下のとおりである。

#### 中心市街地

1位：LDK＋(■・■)……………(4)

LK・■……………(4)

DK・■……………(4)

DK・(■・■)……………(4)

#### 新市街地

1位：LK・■……………(33)

2位：LDK・■……………(22)

3 位：LK+■……………(16)

LK+(■・■)……………(16)

DK・■……………(16)

#### 周辺部

1 位：LDK・■……………( 7)

2 位：LDK+■……………( 6)

LK+(■・■)……………( 6)

### 5. 「続き間」の保有状況

「接続続き間系列」「接続和室+独立続き間系列」および「独立続き間系列」の存在状況についてすでに述べたが、ここでは、「続き間」の保有状況について改めて概略する(表4)。

① 「接続続き間系列」「接続和室+独立続き間系列」「独立続き間系列」の合計は43%であるが、「LDK」および「LK」タイプの「接続その他系列」「その他(洋室系列)」の一部にも「続き間」保有がみられるため、「続き間」保有率は全体で46.1%である。

② 公室規模タイプ別の保有率は、「K」タイプ67%>「DK」タイプ58%>「LK」タイプ43%>「LDK」タイプ40%であり、公室規模との逆相関性がみられる。

③ 延床面積別の保有率をみると、面積増加にともなって20%程度から80%にまで増加するが、保有率50%をこえるのは160㎡程度である。

④ 公室規模タイプごとに延床面積別の傾向をみると、「DK」タイプでは100㎡未満を除いてほぼ全面積帯で60～80%の保有率を示し、「LK」タイプでは120㎡程度から保有率が漸増し、140㎡程度で過半数、160㎡程度以上では70%以上となっている。さらに、「LDK」タイプについては140㎡程度から保有率が漸増し、160㎡程度で過半数となっている。

⑤ 一方、住宅立地別の「続き間」保有率をみると、周辺部59%>中心市街地52%>新市街地41%の順あり、新市街地では「続き間」保有が半数以下となっている。

表4 「続き間」の保有状況

和室続き間保有率		面積別							二層室数			地域別		
	全体	～99㎡	～119㎡	～139㎡	～159㎡	～179㎡	～199㎡	200㎡～	2室	3室	4室～	中心	新市街地	周辺部
LDK	付加室なし	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続和室+独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続その他系列	16.7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	独立和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	その他(洋室系列)	33.3%	0%	0%	0%	0%	0%	66.7%	100.0%	33.3%	0%	0%	0%	100.0%
	小計	39.5%	0%	8.3%	7.4%	30.0%	52.0%	54.2%	71.4%	29.0%	39.7%	50.0%	53.8%	37.4%
LK	付加室なし	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続和室+独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続その他系列	40.0%	0%	0%	0%	0%	0%	71.4%	33.3%	16.7%	66.7%	0%	22.2%	100.0%
	独立和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	その他(洋室系列)	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	小計	43.1%	13.6%	5.4%	35.8%	64.1%	77.8%	42.9%	86.7%	35.9%	34.9%	64.4%	42.9%	65.8%
DK	付加室なし	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	接続続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続和室+独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	接続その他系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	独立和室系列	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	独立続き間系列	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	小計	57.7%	20.0%	68.4%	66.7%	66.7%	80.0%	80.0%	85.7%	60.9%	58.6%	60.6%	57.8%	77.3%
K		66.7%	80.0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	計	46.1%	22.4%	23.5%	35.2%	48.9%	64.6%	52.1%	80.6%	39.4%	42.0%	58.8%	51.8%	58.9%

⑥ 周辺部での「続き間」保有率は「DK」タイプ77%>「LK」タイプ66%>「LDK」タイプ40%のように、公室規模の増加とともに低下しているが、中心市街地では「LK」タイプでの保有率が最も低くなっている。また、新市街地については、「DK」タイプが保有率50%を超えているが、「LK」「LDK」タイプともに40%以下となっている。

## 6. 付加室の接続形式

ここでは、「接続和室」と「接続続き間」の接続形式について、先に述べた類型化に従って概略する。「接続和室」の接続形式を公室規模タイプ別に示したものが表5、同じく「接続続き間」について示したものが表6である。

① 「接続和室」の接続形式は、「両用Ⅰ型」53%、「一体型」39%の両者で大半を占め、「両用Ⅱ型」は5%程度、「通過独立型」は極めて少ない。公室規模タイプによる違いは少ないが、公室規模が大きくなるほど「一体型」と「通過独立型」の割合がやや増加している。

② 「接続続き間」の接続形式は、「両用直列型」と「両用角型」が共に39%で大半を占め、「両用合体型」と「一体併列型」が10%弱で続いている。「両用Ⅱ型」と「一体直列型」は極めて少ない。公室規模タイプ別にみると、規模の小さい「DK」「K」タイプでは「両用直列型」と「両用角型」が90%を占めているが、「LK」タイプでは「両用角型」が減少してその他の形式に分散し、「LDK」タイプでは逆に「両用直列型」が減少してその他の形式に分散している。

## 7. 公室と付加室の位置関係

ここでは、公室と付加室の位置関係について、先に述べた類型化に従って概略する。代表的な住空間構成タイプである8タイプについて、その付加室位置を住宅立地別に示したものが表7である。

① まず、「LDK・■」と「LK・■」についてみると、前者では「一体型」の割合が高く、それに続いて「前方型」であるのに対して、「後者」では「一体型」の割合が低下して多様化している。この違いは新市街地でとくに顕著に現れており、新市街地ではむしろ「後方型」が第1位で、「一体型」「前方型」へと続いている。

② 「LDK+■」と「LK+■」については、前者では「中間型」が70%を占めるのに対して、後者の「中間型」は半数に低下して「前方型」と「後方型」に分散している。

③ 「LDK・(■・■)」と「LK・(■・■)」については、前者では「前方型」が70%を占めて「後方型」へと続いているが、後者では「前方型」が41%に低下して「後方型」35%と「一体型」「中間型」にも分散している。住宅立地別にみると分散の仕方はやや異なるが、後者の付加室位置の多様性はいずれの立地においてもうかがわれる。

④ 「LDK+(■・■)」と「LK+(■・■)」については、両者とも「中間型」が60%以上を

表5 「接続和室」の接続形式

・■の付加室形式

	付加室形式				合計
	一体	両用Ⅰ	両用Ⅱ	通過独立	
LDK	31 41.9%	36 48.6%	4 5.4%	3 4.1%	74 100.0%
LK	36 39.1%	48 52.2%	5 5.4%	3 3.3%	92 100.0%
DK・K	23 33.8%	41 60.3%	4 5.9%	0 0%	68 100.0%
全体	90 38.5%	125 53.4%	13 5.6%	6 2.6%	234 100.0%

表6 「接続続き間」の接続形式

・(■・■)の付加室形式

	付加室形式						合計
	両用Ⅱ	両用合体	両用直列	両用角型	一体併列	一体直列	
LDK	1 8.3%	2 16.7%	2 16.7%	8 50.0%	1 8.3%	0 0%	12 100.0%
LK	2 5.7%	4 11.4%	14 40.0%	10 28.6%	5 14.3%	0 0%	35 100.0%
DK・K	0 0%	1 2.9%	16 45.7%	16 45.7%	1 2.9%	1 2.9%	35 100.0%
全体	3 3.7%	7 8.5%	32 39.0%	32 39.0%	7 8.5%	1 1.2%	82 100.0%

LDK-■

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	0	0	1	2	3
	0%	0%	33.3%	66.7%	100.0%
新市街地	9	9	2	9	22
	40.9%	9.1%	9.1%	40.9%	100.0%
周辺部	2	0	4	3	7
	28.6%	0%	57.1%	42.9%	100.0%
合計	11	9	7	14	32
	34.4%	6.3%	15.6%	43.8%	100.0%

LK-■

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	0	0	0	4	4
	0%	0%	0%	100.0%	100.0%
新市街地	8	3	13	9	33
	24.2%	9.1%	39.4%	27.3%	100.0%
周辺部	0	0	0	0	0
	100.0%	0%	0%	0%	100.0%
合計	8	3	13	9	33
	23.7%	7.9%	34.2%	34.2%	100.0%

LDK-■

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	0	0	0	0	0
	0%	0%	0%	0%	0%
新市街地	1	7	2	0	10
	10.0%	70.0%	20.0%	0%	100.0%
周辺部	0	5	1	0	6
	0%	83.3%	16.7%	0%	100.0%
合計	1	12	3	0	16
	6.3%	75.0%	18.8%	0%	100.0%

LK-■

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	1	0	1	0	2
	50.0%	0%	50.0%	0%	100.0%
新市街地	3	9	4	0	16
	18.8%	56.3%	25.0%	0%	100.0%
周辺部	2	2	0	0	4
	50.0%	50.0%	0%	0%	100.0%
合計	6	11	5	0	22
	27.3%	50.0%	22.7%	0%	100.0%

LDK-(■・■)

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	0	0	0	0	0
	0%	0%	0%	0%	100.0%
新市街地	3	0	2	5	10
	60.0%	0%	40.0%	0%	100.0%
周辺部	2	0	0	0	2
	100.0%	0%	0%	0%	100.0%
合計	5	0	2	5	12
	71.4%	0%	28.6%	0%	100.0%

LK-(■・■)

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	1	0	1	0	2
	50.0%	0%	50.0%	0%	100.0%
新市街地	7	1	5	2	15
	46.7%	6.7%	33.3%	13.3%	100.0%
周辺部	1	0	2	1	4
	25.0%	0%	50.0%	25.0%	100.0%
合計	9	1	8	3	21
	42.9%	4.8%	38.1%	14.3%	100.0%

LDK-(■・■)

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	1	1	2	0	4
	25.0%	25.0%	50.0%	0%	100.0%
新市街地	0	12	2	0	14
	0%	85.7%	14.3%	0%	100.0%
周辺部	0	1	3	0	4
	0%	25.0%	75.0%	0%	100.0%
合計	1	14	7	0	22
	4.5%	63.6%	31.8%	0%	100.0%

LK-(■・■)

地域	付加室位置				合計
	前	中	後	一任	
中心市街地	1	1	0	0	2
	50.0%	50.0%	0%	0%	100.0%
新市街地	12	5	18	0	35
	34.3%	14.3%	51.4%	0%	100.0%
周辺部	0	4	2	0	6
	0%	66.7%	33.3%	0%	100.0%
合計	13	10	20	0	43
	30.2%	23.3%	46.5%	0%	100.0%

表7 公室と付加室の位置関係

占めて「後方型」へと続いている。立地別には、周辺部では両者とも「後方型」が目立つのに対して、中心市街地では実数的には小さいが「前方型」がみられる点が注目される。

⑤ 以上のように、付加室の位置は「接続系列」か「独立系列」かによって異なるとともに、公室の規模や立地によっても異なる傾向をみせることがうかがわれる。

## 8. まとめと今後の課題

① 以上、本論文では、福井市における近年の新築着工住宅について、その住空間構成の実態を検討し、「延床面積」と「公室の規模」および「付加室の構成」に一定の連関的構造がみられること、また、住宅立地によってその現れ方が異なっていることを示してきた。

② 本検討素材の範囲においても、住宅立地ごとの延床面積別にみた住空間構成の実態、あるいは2階室構成との関係など、さらに検討を深めるべき課題が残されている。そのうえで、付加室の利用形態(寝室か家族室か接客室かの区別)の調査を踏まえて、住み手の立場からみた住空間構成の理念に迫ることを今後の課題としたい。

## 参考文献

1. 青木正夫：「明治以降の住様式の変化・発展に関する一考察」，第6回住宅建築シンポジウム『いま、住様式を考える』，住宅建築研究所，1986
2. 九州大学青木研究室：「中流住宅の平面構成に関する研究(1)(2)(3)」，住宅建築研究所報 第10号，第11号，第12号，1983，1984，1985
3. 岡 俊江，竹下輝和，青木正夫：「接客空間とだんらん空間を指標とする類型化と平面構成の

考察—現代の中流住宅の平面構成に関する研究 第1報—, 日本建築学会計画系論文報告集 第383号, 1988

4. 千葉大学工学部服部研究室:「住要求からみた独立住宅の類型化に関する研究」, 住宅建築研究所報 第4号, 1977, 「平面類型からみた住様式の動向に関する研究」, 同第7号, 1980
5. 宇野浩三, 足達富士夫, 眞嶋二郎:「公室空間の構成—北海道の戸建住宅における公室空間に関する研究(1)—」, 日本建築学会計画系論文報告集 第401号, 1989, 「1階居住室の存在形態からみた住宅平面類型と住み方—同(2)—」, 同第409号, 1990
6. 佐々木嘉彦:「東北地方における新しい都市住宅の構え方について」, 住宅建築研究所報第14号, 1987
7. 住田昌二, 松原小夜子, 谷 直樹:「新築農村住宅にみる格式性意匠の存在形態—農村住宅の格式性意匠に関する研究(その1)—」, 日本建築学会計画系論文報告集 第427号, 1991
8. 金安直子, 杉浦 進, 他:「領域構成から見た積雪地域の住宅平面の比較研究」, 日本建築学会計画系論文報告集 第405号, 1989

